3 「学習規律の徹底」と「支持的風土の醸成」により安心して学べる授業

集団で学習する際のルールやマナーである「学習規律」と、ともに尊重し合い、一人一人が存在感を実感できる「支持的風土」は、子供が落ち着いてじっくりと考えたり、安心して友達と交流したりする学習活動の基盤となります。その基盤を確立した上で、協働的に考える場面を設け、子供一人一人の深い学びを実現させることが大切です。

「協働的に考える」場面では…

自他の考えを共有しながら、自分の考えを深めたり広げたりします。
協働的に考える経験を重ねることで、集団としての「学びに向かう力」が育成されます。

ポイント① 目的を明確にする

身に付けさせたい力を踏まえ、何のために意見を交流するのか、目的を明確にしましょう。

ポイント② 形態や対象を工夫する

目的に応じて、形態（ペア、少人数、全体など）や対象（同じ考えの相手、異なる考えの相手など）を工夫しましょう。

【意見を交流する場面の例】
- 解決の見通しをもつために、となりの人と話し合う。
- 別の方法や新たな考えに気付くために、異なる考えの人と話し合う。
- みんなの考えを一つにまとめるために、全体で話し合う。

読解力育成のために

□ 自分の考えの理由や根拠を相手に正しく伝えるために、ノートや資料等を示しながら説明させる。

□「それ」「これ」などの指示語が示す言葉や内容は、具体的に説明させる。

□ 考えの共通点や相違点に着目しながら聞く習慣を身に付けさせる。

など

授業展開の例

※これは一例です。子供の実態や校内研究の内容、教科等に応じて各学校で協議し、実践していきましょう。

学習活動	三つの提案から	読解力育成のために
めあて（課題）	・子供に届くめあて	・すべての子供がめあての内容を理解できているか確認し、授業のスタートラインをそろえる
自分の考えをもつ	・ねらいに即した書く活動	・「～だから…である」など、根拠を明確にして表現させる
協働的に考える	・学習規律 ・支持的風土	・考えの共通点や相違点に着目しながら聞く習慣を身に付けさせる
まとめ	・子供に届くまとめ	・新しく学習した言葉の意味や用語の定義は、板書や文カード等を用いて確認する
振り返り	・ねらいに即した書く活動	・「はじめは」「次に」「最後には」「例えば」など、順序や接続を表す言葉を用いて表現させる

学習規律の徹底・支持的風土の醸成

「長崎県授業改善メソッド」は、長崎県教育庁義務教育課・長崎県教育センター、県内２１市町教育委員会、長崎大学教育学部の協議に基づき作成しました。

令和３年３月 長崎県教育委員会 TEACHING METHOD FOR IMPROVEMENT

長崎県授業改善メソッド

「できた」「分かった」の笑顔あふれる授業を求めて

仲間と力を合わせて課題を解決し、「できた」「分かった」と喜び合う子供たちの笑顔。そんな笑顔があふれる授業にしたい。

初めて教壇に立った日、私たちが抱いた願いです。

また、どれだけ経験を重ねようとも、限りなく求め続ける目標でもあります。その実現に向けて、小さな工夫を重ねる授業改善こそが、学力向上対策の中核となる取組です。

このたび、県教育委員会では、授業改善に取り組む先生方の一助とするために、学校訪問や研修会等で出会った先生方の授業づくりの知恵や工夫を踏まえ、「長崎県授業改善メソッド」を作成しました。

このメソッドは、県が提案する「学力向上のための三つの提案」の授業づくりの内容を具体化する形で整理しています。

長崎県「学力向上のための三つの提案」

平成２９年４月　長崎県教育庁義務教育課

「できた」「分かった」の笑顔があふれる授業

○「めあて(課題)」と「まとめ」が子供に届く授業
○ねらいに即した「書く活動」を重視する授業
○「学習規律の徹底」と「支持的風土の醸成」により安心して学べる授業

２１世紀型学力向上推進緊急プロジェクト

長崎県読解力育成プラン

「本県の学力向上の取組は、他都道府県と比べて遜色がない」、また、「子供たちも、劣っているとは考えられない」にも関わらず、結果が伴わないのはなぜなのか。
その理由の一つとして、「学力が伸び悩む児童生徒は、そもそも問題を正しく読解できていないのではないか」、また、「教師の話を理解できていないのではないか」という、「読解力」に関する仮説が浮かび上がりました。

あわせて、「学力が伸び悩む子供は、問題を正しく読めていないのではないか、教師の話を理解できていないのではないか」という仮説をもとに研究を進め、それを取りまとめた「長崎県読解力育成プラン」の内容を盛り込みました。文章や情報の意味を理解し思考する読解力は、「各教科等の学力」や「学ぶ意欲」の土台となる能力であるとともに、Society5.0の時代を切り拓く子供たちに必要な能力であり、その育成が強く求められています。

また、本メソッドは、１人１台端末により教育環境が大きく変わる中で、先生方が蓄積してきた授業実践とICTとの融合を図り、子供たちを誰一人取り残すことのない学びを実現する上でも、有効に活用いただけるものと考えています。

授業づくり・授業改善に一定の型や流れはありません。
この「長崎県授業改善メソッド」をひとつの手がかりとして、すべての教科等で、先生方が子供たちの「できた」「分かった」の笑顔があふれる授業づくりに発想豊かに取り組み、本県の子供たちが未来を拓くための資質・能力を育んでいただくことを期待しております。

メソッド活用のその前に

「単元（題材）や本時で身に付けさせたい力」を明確にしていますか？

授業づくりにおいては、まず、「単元（題材）や本時で身に付けさせたい力（資質・能力）」を明確にすることが重要です。
時として、「あれも教えたい」「これもさせたい」という迷いが生じることがありますが、身に付けさせたい力がはっきりしていれば、そこにたどり着くために必要な手立てを絞り込むことができます。

1 「めあて（課題）」と「まとめ」が子供に届く授業

授業においては、「めあて」によって学習の見通しをもち、「まとめ」によって学習内容の定着を図るという学びの在り方を、すべての子供と共有することが求められます。
「めあて」と「まとめ」を確実に子供に届ける授業を積み重ねることで、子供は主体的に学ぶ力を身に付けていきます。

「まとめ」

本時の学習を通して、「何が分かったか」「何ができるようになったか」「何を考え、何を学んだか」などを明確にし、学習した内容の定着を図ります。

ポイント①　「まとめ」→「めあて」の順で授業を構想する

身に付けさせたい力や評価規準を踏まえ、「まとめ」から「めあて」の順で授業を構想しましょう。そうすることで、「めあて」と「まとめ」の整合性が高まります。

ポイント②　子供のことばを生かす

分かったことやできるようになったことを問いかけ、子供のことばを生かしながら教師がまとめましょう。また、子供が自分でまとめを書くことができるよう、支援していくことも大切です。

【支援の例】
- 文の書き出しを示して、続きを書かせる。
- 本時の学習のキーワードを示す。
- これまでの「まとめ」を参考にして書かせる。

読解力育成のために

- □ 新しく学習した言葉の意味や用語の定義は、板書や文カード等を用いて確認する。
- □ 自他のまとめの共通点や相違点に着目させ、学級全体でまとめる。

など

「めあて（課題）」

身に付けさせたい力を付けるための活動や方向性、教師が目指す子供の姿などを示します。子供と「めあて」を共有し、学習の見通しをもたせることは、主体的な学びの原動力となります。

ポイント①　子供の問いや思い・願いを引き出す

身に付けさせたい力に迫る子供の問い（なぜ・どうして）、思い・願い（～したい）を引き出しましょう。そのためには、資料の内容や提示の方法、発問の仕方など、「めあて」につなぐための手立てや工夫が大切です。

ポイント②　すべての子供と共有する

子供の問いや思い・願いを生かしながら、本時で何をするのか、何ができるようになればよいのかを明確にすることで、すべての子供と「めあて」を共有しましょう。

【「めあて」の例】
- ○○は、□□のとき、どのような気持ちになったのか考えよう。
- ○○が□□によって変わるのはなぜだろうか。
- ○○が成り立つ理由を、□□に着目して明らかにすることができる。
- ○○するために、□□を工夫して、◇◇しよう。

読解力育成のために

- □ 子供の読解力（正確さと速さ）には、差があることを踏まえる。
- □ 発する言葉や提示する文章が、子供に伝わるよう工夫する。
- □ 指示語が示す言葉や内容は、線を引くなどして具体的に確認する。
- □ すべての子供がめあてを理解しているか確認し、授業のスタートラインをそろえる。

など

2 ねらいに即した「書く活動」を重視する授業

単元（題材）や本時の目標を踏まえ、ねらいに即した「書く活動」を設定することは、子供一人一人が思考・判断し、表現する機会を保障することにつながります。
授業では、例えば、対話的な学びとの関連を図り、「自分の考えをもつ」場面や「振り返り」の場面で、「書く活動」を位置付けることが考えられます。

「自分の考えをもつ」場面では…

各教科等の見方・考え方を働かせながら、解決方法や結論等について、自分なりに予想したり考えたりします。
書くことは、子供が自分の考えと、より深く対話することにつながります。

ポイント①　理由や根拠を明らかにして書かせる

身に付けさせたい力を踏まえ、学習したことや調べたこと、話し合ったことなどをもとに、理由や根拠を明らかにして、自分のことば（絵や図、表を含む）で書かせましょう。

ポイント②　文章で考えを書かせる

穴埋めや選択式ばかりではなく、文章で自分の考えを書かせましょう。そのためには、文章量の目安や具体的な書き方のモデルを示すなど、身に付けさせたい力に応じた支援を行うことが大切です。

ポイント③　子供の考えや気付きを見取る

解決につながる子供の考えや気付き、つまずきを正しく見取り、個や全体に向けて思考を促したり、揺さぶりをかけたりしましょう。

読解力育成のために

- □ 主語や述語を明確にして書かせる。
- □「～だから…である」など、根拠を明確にして表現させる。
- □ 文章から読み取ったことを、絵や図、表を用いて整理させる。
- □ 複数の資料から読み取った情報を整理し、言葉や文章で書かせる。

など

「振り返り」の場面では…

学習したことを振り返ったり、次の学習の見通しを立てたりします。そのことは、自らの学習を調整しながら主体的に学ぶことにつながります。
書くことを通して、子供は自身の学びや変容をあらためて自覚します。

【振り返りにより、期待される子供の姿】
- 自身の成長や変容に気付く。
- 友達のよさや集団で学ぶよさに気付く。
- 新たな課題を発見する。

ポイント①　一人一人の「学び」を振り返らせる

単元や学習のまとまりの中で計画的に設定し、「どのように学習してきたか」について、ノートや板書の記述などをもとに、気付いたことや試行錯誤したことを、一人一人に文章で表現させましょう。

ポイント②　「次の学び」に目を向けさせる

次時につながる気付きや疑問を取り上げたり、学習したことと日常生活との関連を紹介したりするなど、次の学習内容や身近な事象への関心や興味が高まるよう工夫しましょう。

読解力育成のために

- □ 主語や述語を明確にして書かせる。
- □「とても」「たくさん」「すごく」といったあいまいな表現ではなく、具体的に表現させる。
- □「はじめは」「次に」「最後には」「例えば」など、順序や接続を表す言葉を用いて表現させる。

など